

近江から見る 『街道をゆく』のメッセージ

司馬遼太郎氏没後25年記念シンポジウム記録集



司馬遼太郎氏没後25年記念シンポジウム
近江から見る『街道をゆく』のメッセージ

司馬遼太郎氏没後25年記念シンポジウム
近江から見る『街道をゆく』のメッセージ

近江から見てゆくの
私はこれが見たかったのだと、
先生の言葉で書いていたものでないも
のですが、
読者さんで喜ぶことがある。
2009年に、最初は京都にほんが、
京都府、京都にほん。



近江から見る 『街道をゆく』のメッセージ

司馬遼太郎氏没後25年記念シンポジウム記録集

基調講演



うえむら ようこう
上村 洋行氏 (公益財団法人司馬遼太郎記念財団理事長／司馬遼太郎記念館館長)

1943年(昭和18年)東大阪市生まれ。同志社大学法学部法律学科卒業後、1967年(昭和42年)産経新聞社入社。京都支局が振り出しで記者生活。1970年(昭和45年)大阪本社編集局社会部。その後、京都支局次長、文化部次長、メディア報道部長。1995年(平成7年)京都総局長。1996年(平成8年)大阪本社編集局局長。

1996年 司馬遼太郎記念財団設立。同常務理事
1999年 司馬遼太郎記念財団専務理事
2001年 司馬遼太郎記念館館長(兼務)
2012年 公益財団法人司馬遼太郎記念財団理事長

パネルディスカッションパネリスト



あべ りゅうたろう
安部 龍太郎氏 (作家)

1955年(昭和30年)6月福岡県八女市(旧・黒木町)生まれ。久留米工業高等専門学校機械工学科卒業。東京都大田区役所に就職、後に図書館司書を務める。その間に数々の新人賞に応募し「師直の恋」で佳作となる。1990年(平成2年)に発表した『血の日本史』でデビュー。この作品で注目を集め「隆慶一郎が最後に会いたがった男」という伝説がうまれた。作品に「関ヶ原連判状」「信長燃ゆ」「等伯」「迷宮の月」など多数。安部龍太郎オフィシャルサイト <https://aberyutarou.com/>

2005年『天馬、翔ける』で第11回中山義秀文学賞を受賞 <近著>
2013年『等伯』で第148回直木賞受賞 2020年7月～(最新作)『家康1～6』幻冬舎
2015年 福岡県文化賞受賞 2021年7月『特攻隊と大刀洗飛行場』PHP出版
2017年 福岡市文化賞受賞 2021年7月『対決！日本史2 幕末から維新篇』潮出版社
2020年 京都府文化賞受賞 2021年7月『シルクロード・仏の道紀行』潮出版社



さわだ とうこ
澤田 瞳子氏 (作家)

1977年(昭和52年)京都府生まれ。同志社大学文学部卒業、同大学院博士前期課程修了。奈良仏教制度史の研究に携わった後、2010年(平成22年)に長編作品『孤鷹の天』でデビューし、同作で第17回中山義秀文学賞を最年少受賞。2013年(平成25年)『満つる月の如し仏師・定朝』で第32回新田次郎文学賞、2016年(平成28年)『若冲』で第9回親鸞賞、2020年(令和2年)『駆け入りの寺』で第14回舟橋聖一文学賞、『星落ちて、なお』で第165回直木三十五賞をそれぞれ受賞。現在、同志社大学客員教授。2019年(令和元年)から2020年(令和2年)6月まで毎日新聞夕刊に掲載された連載小説『恋ふらむ鳥は』では、万葉歌人・額田王を主人公に近江京の興亡を描いた。



いま りょうご
今村 翔吾氏 (作家)

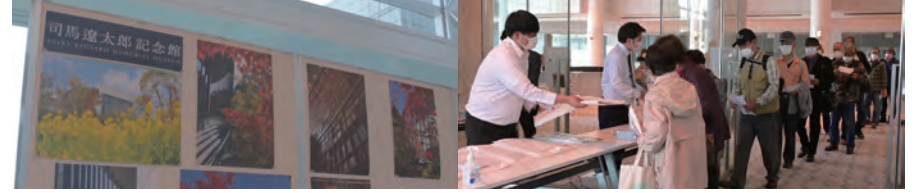
1984年(昭和59年)京都府生まれ、滋賀県在住。ダンスインストラクター、作曲家、守山市埋蔵文化財調査員を経て作家デビュー。2016年(平成28年)『狐の城』で第23回九州さが大衆文学賞大賞・笹沢左保賞受賞。2018年(平成30年)『童神』で第10回角川春樹小説賞受賞。『童の神』(『童神』改題:角川春樹事務所)で第160回直木賞候補。2020年(令和2年)『八本目の槍』(新潮社)で第41回吉川英治文学新人賞、第8回野村胡堂文学賞受賞。『じんかん』(講談社)で第163回直木賞候補、第11回 山田風太郎賞 受賞。2021年(令和3年)『羽州ぼろ 蔦組シリーズ』(祥伝社)で第6回吉川英治文庫賞受賞。2022年(令和4年)『塞王の橋』(集英社)で第166回直木三十五賞受賞。TBS報道番組(JNN系列)『Nスタ』レギュラーコメンテーター出演中。

コーディネーター



ふる や かず お
古屋 和雄氏 (文化外国語専門学校校長・元NHK エグゼクティブアナウンサー)

1949年(昭和24年) 10月1日 山梨県富士河口湖町生まれ、富山県育ち。
1972年(昭和47年) 3月 早稲田大学第一政経学部政治学科卒業。
4月 NHK入局。東京のほか福井・釧路・大阪放送局に勤務。
2013年(平成25年) 3月 Eテレ「ここが聞きたい！名医にQ」
ラジオ第一放送「日曜バラエティー」を以てNHKを卒業。
同 年 4月 代々木にある文化学園大学に教授として就任。
担当講義は、「TVジャーナリズム論」「マスメディア」
同 年 7月 文化外国語専門学校 学校長を兼任。
菜の花忍シンポジウムの司会を長年務めている。



- **日時** 令和3年(2021年)10月30日(土)
開場 13:30 開演 14:00 終了 16:30
- **場所** 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 中ホール(大津市打出浜15番1号)

PROGRAM - プログラム -

- **開会挨拶**
三日月 大造 (滋賀県知事)
- **基調講演**
「司馬遼太郎と旅をして」
上村 洋行氏 (司馬遼太郎記念館館長)
- **パネルディスカッション**
「近江から見る『街道をゆく』のメッセージ」
パネリスト
安部 龍太郎氏 (作家)
澤田 瞳子氏 (作家)
今村 翔吾氏 (作家)
コーディネーター
古屋 和雄氏 (文化外国語専門学校校長・元NHKエグゼクティブアナウンサー)

◆関連展示等として、過去5年間の司馬氏の作品に関連した滋賀県の取組展示、令和元年度の成安造形大学による『街道をゆく』調査事業の展示、司馬遼太郎記念館の展示、小林修氏の写真展示、朝日新聞出版による物販を行いました。



※当日は、文字による情報保障として要約筆記を行いました。

参考:滋賀・近江が登場する『街道をゆく』の主な巻 一覧

- 1巻『湖西のみち』大津～安曇川～杵木谷
- 2巻『韓のくに紀行』蒲生 鬼室神社
- 4巻『北国街道とその脇街道』今津～敦賀～栃ノ木峠
- 7巻『甲賀と伊賀のみち』伊賀上野～紫香楽宮址～瀬田
- 16巻『叡山の諸道』浜大津～坂本・生源寺、双巖寺、瑞心院、滋賀院門跡、日吉大社ほか、横川中堂～無動寺谷～大講堂
- 24巻『近江散歩』不破の関から寝物語の里～柏原宿～彦根城～姉川古戦場～国友～安土城址～近江八幡

開会挨拶

本日は、司馬遼太郎先生没後25年記念シンポジウム「近江から見る『街道をゆく』のメッセージ」に、全国からたくさんの方々に御参加いただきありがとうございます。

さて、司馬先生は、「近江路は春がいい」と『街道をゆく』の中で本県を御紹介されています。また、「平野は、冬こそいい」ともおっしゃっておられますが、私は山粧う秋が一番いいと思っております。その錦秋の候に、皆様をこうして湖国近江・滋賀にお招きできたことを心から嬉しく思っております。

この機会に、司馬先生が投げかけられた様々な問いかけやメッセージを皆様とともに味わい、一緒に考えてまいりたいと思っております。

本シンポジウムは、司馬先生が亡くなられて20年の節目である2016年に、米原市で初めて開催させていただきました。今回で2回目となるものです。公益財団法人司馬遼太郎記念財団の上村理事長をはじめ、財団の皆様には多大な御高配を賜り、心から感謝申し上げます。また本日は、パネルディスカッションと

いたしました。安部龍太郎先生、澤田瞳子先生、今村翔吾先生に御登壇いただき、司馬遼太郎先生の様々なメッセージを読み解いていただく予定をしております。さらに、コイデイナーターは古屋さんということ、本日もスケジュールを調整していただき、御登壇いただくことになりました。一緒に楽しみたいと思います。

司馬先生は、湖国・滋賀を、「雨の日は雨のふるさとであり、粉雪の降る日は川や湖までが粉雪のふるさとである」ともおっしゃっています。が、こうした自然の恵み、琵琶湖の恵み、これらを私たちは大切にしてまいりたいと考えております。高度経済成長期以降に汚してしまい、傷つけてしまったものを取り戻し、次の世代のためにより良くしてまいりたいと考えております。生きるために必要な糧を、環境を大切にしながらいただくということについても、滋賀で実践していきたいと考えております。

本日、私は自分なりに司馬先生から投げかけられた「問い」について考

えたいと思ひ、出席いたしました。

司馬先生は、明治後でできた日本人のわるい癖に水を掛けてみたくて、私はこの紀行の手はじめに日本列島の中央部にあたる近江をえらんだと『街道をゆく』の中でおっしゃっています。

今、私たちは新型コロナウイルス感染症の問題に直面しています。また、本県は早くから渡来文化が伝わり、様々な先進文化を受容し、発展してきました。「叡山の諸道」で紹介された比叡山延暦寺は、伝教大師最澄が亡くなられて1200年の節目にもなります。こうした生きものや自然との関わり、利他の心、隣国との友好など色々なことを一緒に考えてまいりましょう。どうぞシンポジウムをお楽しみください。

基調講演

司馬遼太郎と旅をして

独特の『街道をゆく』の取材方法

今日は「司馬遼太郎と旅をして」というテーマで話をするのですが、『街道をゆく』がどういう形ではじまっていた、司馬遼太郎がどういう取材方法をとってきたのか、私が参加し、同行した『街道をゆく』の思い出、あるいはそこから浮かんでくる司馬遼太郎の考え方で言い及ぶことができたかと思っております。

『街道をゆく』は、大阪万博がありました1970年（昭和45年）に、『週刊朝日』から執筆依頼があり、翌年の1月から、ここ滋賀県の「湖西のみち」でスタートしました。司馬遼太郎は滋賀県が好きだったもので

すから、連載のスタートに滋賀県を選んだのだろうと思います。当初は1年くらいでやめる感じで受けたのですが、それがなんと25年間全43巻に及びました。



この『街道をゆく』のような取材ツアーは、普通は編集担当の方と司馬遼太郎がいればそれで事足りるのだと思いますが、司馬遼太郎の場合は必ず妻であり、私の姉である、福田みどりを同行して、そして、挿絵画家、最初は須田勉太画伯で、次が安野光雅画伯といった人たちも同行しました。それだけにとどまらず、あとからカメラマンも加わりました。

さらに、他の新聞社、あるいは出版社、そういうマスコミの編集者・記者のみならず、いわばライバルですが、そういう人々も加わりました。作家、学者、知人もその都度参加をされています。ときには十数人になることもありました。といっても、

一緒に行くわけではありません。旅程の後半から参加したり、2泊ぐらい同行したり、そういう参加の仕方です。最大で十数人になるということです。

私は、司馬遼太郎から20年遅れて新聞記者生活を送りましたが、新聞記者の取材というのは現地にいる人々に会って、ノートに必死になつてメモをとります。つまり「聴く」ということに大変重きを置いて取材をします。しかし、司馬遼太郎の場合は、ノートは持っているのですが、私たち新聞記者がするような取材方法ではありませんでした。司馬遼太郎も新聞記者でしたから、その心得は十分にあるのですが、作家になつ



公益財団法人
司馬遼太郎記念財団理事長
司馬遼太郎記念館館長

上村 洋行

てからの取材方法は、ほとんどメモをとっておりませんでした。その土地の方言であるとか、お会いした人のちょっとした特徴、そういうものをメモにとる。あるいは、自分が風景を見て感じ取ったものを少し書く程度であって、その時に見た道具であるとか、あるいはその人の顔を思い出して、あとで絵に描いてみたりしていました。もちろん宿泊先に帰ってから、思い出したようにしてメモをとる、あるいは補足するということもありましたが、少なくとも新聞記者の取材のような風景ではありませんでした。

司馬遼太郎の場合は、小説を書く時も、できるだけ現地に赴くということをやっていました。けれども『街道をゆく』の場合の現地に赴くというのは、それとは違っていました。では『街道をゆく』の場合はどうだったかと言いますと、自分で書斎の中で調べるだけのことは調べて、現地の地図、略図くらいのことはすぐ描けるくらいに調べて、そして赴く。赴いた時に、その場所の風景は自分が想像したものとは全く違う

ものが広がるわけですが、それはそれでいい。つまり現地の空気の中で、その土地の風を自分の体の中に取り入れたい。そうすることによって、創作というか物事を書いていくことの気分が高まってくる、ということをお話しておりました。このように『街道をゆく』の取材のスタイルは独特のものでした。

雑談の名手

取材の時の司馬遼太郎を囲む雑談の光景も、たいへん魅力的でした。行程とともに毎夜、食事のあと、参加者が司馬遼太郎の部屋に集まって、雑談会をします。記者の方や編集者の方が、土地で見聞きしたことを話すことがきっかけで雑談が始まっていくわけです。司馬遼太郎という人はたいへん話好きな人です。編集者の方がよく「司馬さんの話したいへん面白くて、雑談の名手と言われてるんですよ」とおっしゃったことがあります。私も、私には聞きたくありません。聞きたくありません。聞きたくありません。

この雑談会は、いつの間にか、

すが、その恩師をお誘いして、総勢10人が参加しました。



まだ当時はモンゴルの首都、ウランバートルには日本から直行便はなく、たいへんな旅でした。新潟の空港からスタートします。新潟で1泊をして、そしてシベリアのハバロフスクに渡って、そこでも泊まり、次にバイカル湖のあるイルクーツクという都市へ行って、そこでまた泊まって、そこからモンゴルのウランバートルに入るといって、今では信じられない行程でした。今は関西国際空港からだいたい4時間で行くことができます。しかし、当時はそういうルートを通る以外にありませんでした。まだ、ソ連の時代で、モンゴルは社会主義国でした。そのモンゴルと国交が回復して、すぐに行けるといって、司馬遼太郎も心の昂りがあつたと思います。

ウランバートルは首都ですから、人口が多く、草原、砂漠というようなイメージとは程遠い都市です。その当時は、モノクロームの風景で、ソ連と同じように道路幅が広く、両脇に5、6階程度のビルがずらっと並んでいる風景でした。夜は、光やネオンのない風景で、なんとなく寂しく感じました。

モンゴルにはまだ日本の大使館はできていませんでした。ウランバートルホテルという、首都の格式の高いホテルの一室で、日本の大使が、その当時は代理大使でありましたが、業務に当たっておられました。たまたま、その代理大使が、司馬遼太郎の大阪外大の先輩の方だったものですから、大変話が弾んだことを思い出します。その時に、のちに司馬遼太郎の作品にも出てくるのですが、通訳を担当してくださいました女性も、ツェベクマさんという方でした。たいへん聡明な方です。数奇な運命を辿られた方でした。その方が行程の全通訳および案内をしてくださいました。

その出会いがあつて、十数年のちに司馬遼太郎が、『草原の記』という

司馬遼太郎のひとり話のようになっています。そして、ほんとに不思議なことなんです。雑談がいつの間にか文明論に変わったり、文化論に変わったり、そのまま原稿にしてもいいような感じに変わってしまった。自宅の茶の間で雑談をしていても、そういう不思議な感覚になったことが何度もありました。

シリーズ後半から参加された安野光雅画伯は、あの司馬さんを囲んでの話は、いつも最後は司馬さんのひとり話のようになっていく、それが大変楽しくて、また、毎晩違う話だつたとおっしゃっていました。また、考古学者の森浩一先生は「司馬さんの話になったときに、これがエッセイあるいは小説にも載っていないような話で、愉快で大変知識を得ました」ということをおっしゃっていました。編集者の皆さんからも「あの雑談の時、記録あるいは録音をする」と、司馬さんはおそらく断られただろうと思いますが、あの時の記録が残っていたら、もっと多くの人に読んでいただけたことになったんじゃないか」ということをあとで聞いた

作品を、ツェベクマさんを主役に据えながら、遊牧の人々、モンゴルを軸に遊牧の世界を舞台に考えた作品を書きました。



ウランバートルで2泊ぐらいいて、いよいよ司馬遼太郎が憧れているゴビ砂漠に行きました。ゴビ砂漠はサハラ砂漠のような砂の砂漠の風景ではありません。現地では、乾燥した荒地の状態をゴビと言うわけです。そういう前知識は持ちながら、ウランバートルから飛行機でゴビに行くわけです。我々の行き先は砂漠のいちばん南側、南ゴビというところに行くことになっていました。途中真ん中のゴビに一旦着陸して、南ゴビに行くので、2時間余りかかりました。やっぱり広い国土だなと思いましたが、南ゴビに降りた時の驚きは今でも言葉では言い表せません。ちょうど夕方、晴れていました。私と家

ことが何度かありました。

忘れられない笑顔

司馬遼太郎が亡くなって25年になります。そして、記念館ができて、20年になるんですね。時折、記念館でふと司馬遼太郎のことを思い出することがあります。自分の中に出てくる司馬遼太郎は、いつも笑顔です。あまり険しい顔とか難しい顔は私の記憶の中にはありません。

その笑顔の中で、ちょっと忘れられない笑顔がありました。それは、皆さんにお話をしようかと思えます。

それは、司馬遼太郎が、少年の頃から憧れていたモンゴルに行った時のことです。モンゴルと日本の国交が回復したその翌年、1973年（昭和48年）の8月末に、『街道をゆく』『モンゴル紀行』がスタートしました。その取材には、司馬夫妻のほかに、私ども夫婦、そして挿絵画家をしてくださった須田剋太画伯、そして編集者の方、知人の方、そしてもうひとり、司馬遼太郎は大阪外国語大学蒙古語部の卒業でありま

内の2人が先に飛行機を降りてびっくりしました。周りに何もありません。ただ地平線が見えます。足元を見ますと10センチほどの草の一面が生えていました。また、薄紫色の小さな花が生えていました。ニラ科の植物らしいのですが、なんとなく甘い香りがずつと漂って、甘い香りが漂っていました。そのまま誘われるようにして向こうに行つて、ふつと後ろを振り返りますと、飛行機の機影が水平線まで届くよう、自分の影もずいぶん長く伸びていることになり、びっくりしました。飛行機の方を見ますと司馬遼太郎と須田画伯が降りてきました。そして私たちが先導するような格好で地平線側に歩きました。そして、立ち止まると、司馬遼太郎が笑顔で近づいてきました。須田画伯も一緒に来られ、私どもの側に来て、佇んで、同じように地平線を眺めていました。ずっと司馬遼太郎は笑顔のまま。斜めから夕日が差し込んできて、司馬遼太郎の顔を赤く染めていました。

本来ならば、司馬遼太郎という人は大変饒舌家ですから、その時の

感想とかをすぐに周りの人に話したと思うのですが、全く無言のままです。ただ笑顔、夕日の中で白髪が銀色に輝いていました。沈黙したままで、だから私も話を切り出すこともできずにじっとしていました。そして突然須田画伯が「司馬さん絶句です」とおっしゃった。これは大変間の抜けた言い方で、普段ならばここで大笑いになったり、司馬遼太郎が須田画伯に何か話したり、このゴビ砂漠の感想みたいなことを言うはずであったのですが、司馬遼太郎からは全く言葉が出ませんでした。

須田画伯のその言葉だけが残って、全員がずっと黙ったまま地平線に佇んで、司馬遼太郎が終始笑顔で無言でした。この笑顔を、いまだにまざまざと思い出します。

少年の頃からモンゴルに憧れて、遊牧民あるいは草原というものに変化憧れていた司馬遼太郎は知っており、けれども、それほどまでに感動し、言葉が出ないような状態が続いたことに、私はその時なんとなく司馬遼太郎と一緒にここへ来て良かったんだという想いを持ったわけでした。

ようになった。そのことからゴビの砂漠、あるいは遊牧民の生活や歴史文化にいろんな関心を持って資料類を読みつつ、夢想をしていたという時代が過ぎていきました。

どうもそれによって、司馬少年には創造と想像という2つの創造力・想像力が宿ったように、私は思います。後に司馬遼太郎は、朝鮮半島から中央アジア、あるいは東欧のハンガリー辺りまでの広大な地域から日本や日本史をもう一度眺め直すということを頭の中でずっとやり続けた、

モンゴルへの思い

なぜ司馬遼太郎がそれほどまでにモンゴルへ憧れたのかということを考えますと、戦前の司馬遼太郎の旧制中学の頃に遡ります。昭和11年か12、13年の頃かと思えます。司馬遼太郎のいた旧制中学というのは、大阪の住吉大社から大阪城にかけて台地のようにならんと盛り上がった丘陵地帯、上町台地と言いますが、その中にある上本町という近鉄電車の駅周辺にあった私立の上宮学園でした。

ある授業の時に、これは英語の授業だと思うのですが、先生がニューヨークという地名を出したので、司馬遼太郎少年が手を挙げて、ニューヨークという地名の由来は何ですかと質問したのです。そうするとその先生は、お前はそんなことを言うから勉強ができないんだ、ということと言ったんですね。先生は答えをはぐらかした。司馬遼太郎はそれでも自分の想いが止められなかった、質問の答えを知りたい。それで、学校のちよど坂を下りますと日本橋の電気街になっておりますが、そ

こに大阪市立の図書館があったものですから、そこに行つて本を読んだらすぐに解答が出てきたというんですね。当初はオランダ領で、ニューヨークアムステルダムと名付けられていたが、イギリス領になって、当時の国王の弟がヨークという人であったので、ニューヨークとなったということが書いてありました。

その時に、本を読んだら物事が分かる、先生と感情的な話にならなくても済むんだと思つたのでしょうね。だからそこからは、私なんかとは全く違う行動に移っていくわけです。ほとんど毎日のように行って通つた。そして、昭和17年、その近くの大阪外国語大学に入って、昭和18年の学徒出陣で、旧満州の戦争学校に訓練に行くまで、その図書館にほぼ毎日のように通つていたと言うんですね。しまいに読む本がなくなったので、料理の本まで読んだ、という話をしていました。私はその話を聞いて、ちよどと半ば眉唾的に聞いておりました。

しかし、今から20年ほど前ですが、ボジウムに参加しました。そして一番最近では、2016年の夏に、私どもの記念館の友の会の皆さんと一緒に「モンゴル紀行」の跡を訪ね、ゴビ砂漠までいきました。

そして驚きました。最初から数えて3回目の友の会のツアーで行つたモンゴル訪問で、モンゴルの変容ぶりに驚きました。風景が一変しておりまして、洒落たビルができていましたし、当時私たちがゴビの砂漠に双発の飛行機で降りた時には、吹き流しが一本だけで滑走路がなかったのですが、その滑走路のなかつた場所が地方空港に変わっていました。そして当時、ゲルという移動式のテントがゴビの中には点在し、馬もいて、いかにもモンゴルという風景がありましたけれども、今は自動車とバイクが変わって、ゴビの荒涼たる砂漠の中にアスファルトの幹線道路ができて、そこを車が行き来してました。そしてスマートフォンが、ウランバートルの街、そしてゴビの中にも普及し、アンテナも建つていました。マンションはもう日本と全く変わらぬ。若者はおしゃれで、風

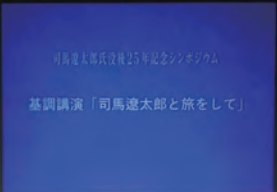
当時大阪外国語大学の学長をされていた方が記念館にお見えになって、こうおっしゃいました。「私はその図書館の係の人をたいへんよく知っている。係の人がおっしゃるには『司馬少年は、毎日門限が過ぎてても本を読んでいた。そのために自分も早く帰れと言いくくなくなって一緒に1時間ぐらい付き合っていましたよ。翌日の勤務が大変でした』と。その話は本当でしょう」と。

あとで私が断片的に聞いた話をまとめていきますと、どうも旧制中学の頃に司馬遼太郎は、古代中国という隋、唐の時代ですね、さらに遡って古代中国を軸に周辺部にいた民族、匈奴であるとか、烏孫、あるいは羯や羌という民族名に、これはなんだろうと関心を持ったと思えます。その中に蒙古、今のモンゴルもありました。司馬遼太郎が青年の頃は、多くの青年たちが日本よりも大陸に憧れるような時代の空気がありました。そういうこともあって、司馬遼太郎は遊牧民あるいは古代中国のいろんな物事を夢想することが大好きで、そんなことはばかり考える

景が変わっていました。なんとなく嬉しくもあり、寂しくもありという感じでありましたが、ただ、2016年に行つた時、ゲルの外に出ますと、夜には天の川がこうもはつきり見えるものかと輝いて、満天の星空は健在でした。そして、草原の草の香りもそのままに。やっぱりこのゴビというところは人を惹きつけるものがあるんだなと思えました。司馬遼太郎はゴビが好きで、馬賊になつてもいいんだと考えたとも言っていました。司馬遼太郎がモンゴルツアーの第一歩で一言も話さなかつたというのは、最初に大地に足を踏み下ろした時には、私以上の感動を受けたのだということが分かりました。

日本人を考え続けた司馬遼太郎

司馬遼太郎の『街道をゆく』の世界は、アジアはモンゴルだけではありません。「韓のくに紀行」「耽羅紀行」というタイトルですが韓国、中国、そして「台湾紀行」へとつながっていきます。中国は3つありまして、蜀という、これは旧名でありますけれども、四川省の「蜀と雲南のみち」



基調講演「司馬遼太郎と旅をして」



というタイトル、それから「江南のみち」、そして、閩というこれも旧名ですが、「閩のみち」という3巻が中国編としてあります。この「閩のみち」では東西文化の交流について考えました。



ヨーロッパにいきますと「オランダ紀行」、これは世界でも先駆けて



オランダが市民社会を築いた、そのオランダと日本の交流を考えるためにオランダに行きました。オランダとは戦国時代から江戸期にかけて日本との親交が長崎を通じて深くあった土地でもあります。



それからアイルランドはケルト民族、あるいはアジア、アイルランドの文化の源流を考えるために行きました。

司馬遼太郎が『街道をゆく』で国内外を歩き来たしたのは、やはりアジアの一員としての視座から、日本の現在、あるいは過去・未来を眺めたためだったのだろうと思います。アメリカに行くというお誘いが読売新聞からありましたが、その時はいったん断っています。なぜ断ったかというと、アメリカというところをよく知らない。ヨーロッパは先ほど言ったように自分の小説の世界と何か結びついていることで、ヨーロッパについてはずっと考え続けてきた。アジアについても考えてきた。けれどもアメリカについては知らない、アメリカは小説と映画だけで十分だというのでいったん断るわけです。



しかしその後、普遍的なものと言いますか、モノとか流行みたいな物事が起こってくることを文明だと考えるのであれば、いま文明として存在するのはアメリカだけではないだろうか、と考える。そしてそのアメリカの現状みたいなものを探ってみることは、ひよっとしたら自分にとっていろいろ考えることができるかもしれない、という淡い期待を持って引き受けました。それが、読売新聞に連載した『アメリカ素描』です。一方、『街道をゆく』では「ニューヨーク散歩」というものが出ました。この2つはアメリカの文化を通じて、文化と文明とはなんぞやということ、を司馬遼太郎なりに考えた作品であります。

さらに、『街道をゆく』とは関係

はありませんが、ベトナム戦争が終る頃に、ベトナムに行きました。これは産経新聞の連載になりましたが、人間の集団について、つまり戦争と国家、そして民族というものを考えた作品です。3、4年前に、ベトナムに赴任するという経済界の方が記念館にお越しになって、そんな話



続いて「南蛮のみち」というタイトルで2巻ものを出しています。フランスとスペインの国境にバスクという地域があります。ここは司馬遼太郎の関心が高かった場所でありますが、フランスにもスペインにも属さない、独自の文化を持った古くからある民族です。フランシスコ・ザビエル生誕の地でもあります。ザビエル城を訪ねるのが第1巻。そして第2巻では、大航海時代と日本との関係を考えるために、エンリケ航海王子のことを考えながら、ポルトガルを南下しまして、ヨーロッパの南端サグレス岬まで旅をして、その南端で大航海時代とはどうだった

をすると読んでいかれて、ベトナムのことがよく分かったとおっしゃっていました。今読んでも、なんとなくそういう感じ、あるいは世界との関係が、あるいは民族というものが何であるかが分かる作品なのだろうと思います。このベトナム行きは、あとで分かったのですが、モンゴルに行った「モンゴル紀行」と同じ年の1973年です。4月にベトナムに行つて、そして8月末にモンゴルに行っていました。まだ、司馬遼太郎が50歳にならないくらいの時でした。この頃は、本当に元気だったんでしょうね。



『街道をゆく』にまつわる自分の体験と合わせて司馬遼太郎の思いをお話いたしました。ありがとうございました。

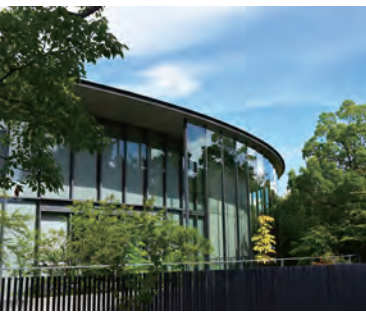
のかと実感します。

このように司馬作品にはそれぞれのテーマはあるのですが、根底にあるのは、日本人とは一体何なのか、あるいはこの日本という国はどんな国なのかということを考えることです。このヨーロッパ編は特に日本との関係を考える旅でもあったようです。バスクについては大変早い時期から関心を持っていたように、司馬遼太郎というペンネームを名乗る前から関心を持っていて、バスク人の剣客を主人公にした『奇妙な剣客』という短編がありますが、ぜひお読みになったらいいと思います。南蛮船のバスク人でフェンシングの原型のようなものを操る剣士であります。日本にきたらささてどうなったのかという話ですが、そういう小説も書いておりました。

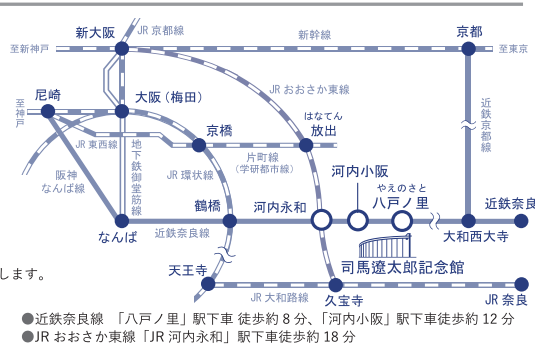
このように司馬作品というのは、常にとの地に行つても日本との関連を考える。例えば、中央アジアの一点から懐中電灯で日本列島を照らすようにして、日本史、日本の出来事考えた、ということをお話しておりました。

司馬遼太郎記念館

SHIBA RYOTARO MEMORIAL MUSEUM



- 所在地 〒577-0803 大阪府東大阪市下小阪 3-11-18
- TEL 06-6726-3860
- FAX 06-6726-3856
- HP <https://www.shibazaidan.or.jp>
- 開館時間 10時～17時（入館受付は16時30分まで）
- 休館日 毎週月曜日（祝日・振替休日の場合は翌日が休館）
年末年始（12月28日～1月4日）
※GWの4月26日（火）～5月8日（日）は連日開館します。
- 入館料 大人500円、高・中学生300円、小学生200円
（20名以上の団体は2割引）



近江から見る『街道をゆく』のメッセージ

パネリスト

◆安部 龍太郎氏(作家)

◆澤田 瞳子氏(作家)

◆今村 翔吾氏(作家)

コーディネーター

◆古屋 和雄氏(文化外国語専門学校校長・元NHKエグゼクティブアナウンサー)

(以下敬称略)

◆それぞれの司馬遼太郎

古屋 司馬遼太郎さんが亡くなられて25年というこの節目を、司馬さんが大好きだった近江からお伝えできることは大変意味のあることだと思っております。まず、みなさんの自己紹介も兼ねまして、司馬さんあるいは司馬遼太郎さんの作品に感動したことや、司馬さんとの関わりについてお話しいただければと思います。今村さんいかがでしょうか。

今村 僕は小学校5年生の時に、歴史小説を読み出したんですが、亡くなられて25年という、僕が小学校

時に思いました。

それぞれの世代の方が、それぞれの時代の土方がかっこいいと言われるんですが、これからの若者たちにとってそれは岡田准一さんになっていくのかなと思います。僕もいつか孫ができる歳になったら、その時に誰々の土方がよかったと孫に言えるようにします。

古屋 ありがとうございます。澤田瞳子さんは、司馬さんあるいは司馬さんの作品についていかがですか。

澤田 私は一番最初は、短編から入りました。元々、小学生の頃に捕物帳を読み始め、中学に入った後、いろんな歴史小説を基本から読んでみよう、みたいなキャンペーンを自分で行いました。学校の図書館にあった平岩弓枝さんの『御宿かわせみ』などを片っ端から読んでいくんです。その時期に、司馬さんの作品も片っ端から読んでいったのが、一番最初の関わりです。

大学に入って、一人で旅行に行くようになった時に、旅先のことを手っ取り早く知るのに、『街道をゆく』を買いました。今でもよく覚えて

6年生の時にお亡くなりになって、僕が司馬先生の小説を読んでいた時にはもうお亡くなりになっていたので、新作は出ません。読める司馬先生の作品の冊数がどんどん減っていくのがすごく辛かったことをよく覚えています。中学校の時に司馬先生の本を全部読み切りました。

司馬先生の作品にはいろんなタイプの小説があり、『街道をゆく』も好きですが、僕がいちばん好きなのは『風の武士』という作品です。初期の作品が結構好きで、最初に読んだのが『風の武士』だったと思います。それで印象に残っています。

いることとして、初めて東京に行った時に、宿が本郷近辺だったんですが、その時は『街道をゆく』の「本郷界限」を買って、それを持って旅行に行きましたね。

私は、大学が同志社大学だったんですが、先ほど上村館長のお話にもありました、考古学者の森浩一先生の授業も受けました。ちょうど私が在学中に定年退官なさいましたが。講義の中で森先生は「君たちは司馬遼太郎を読んでいるか」と授業の途中でおっしゃることが2、3回あった気がします。そんな時、森先生の授業は脇の方にずれていくことが結構あったんですね。司馬さんはいろんなことを知っているし、様々なことに興味がある人だと、何をすることもひとつのものだけに詳しくてはよくないと。司馬さんのように幅広い視点を持って、というところから最近の研究ではあれがよかった、これがよかったみたいを広げていかれました。私はそれまでは、司馬さんの作品は純粋に読んで楽しいと思っていたんですが、森先生が授業のつかみなどに、あの作品がどうかと語

古屋 今『燃えよ剣』が映画で出ていますが、この作品はいかがですか。

今村 『燃えよ剣』は、写真でお見せしたいぐらい、ポロポロになるほど繰り返し読んでいます。当時のものをずっと繰り返し読んでいて、もうカバーが外れてしまっているんですが、この前スタッフが捨てようとした時にいやこのカバーは大切だから置いといてくれと言いました。『燃えよ剣』は、僕にとっては歴史小説の教科書みたいなところがあって、最初、上巻の部分では、土方歳三という個人を見て、下巻では引きで土方を見て、僕たちの知っている土

られるのを聞いて、なるほど司馬さんの作品は、純然たるエンターテインメントではなく、ものの考え方を広げていくやり方としても読めるのだと思ったことをよく覚えております。

古屋 皆さんいろんな感じ方がおありですね。安部さんはいかがでしょう。

安部 司馬さんは1923年のお生まれですが、僕は1950年生まれですから、ちょうど息子の世代になると思っています。最初に司馬さんの本を読んだのは、学生寮の時で、『竜馬がゆく』を読みました。その頃僕はラグビーをやっておりました。練習ですごく疲れて帰るんですが、司馬さんの本を読んでいると、疲れが抜ける感じがしましたね。それは、テンポの良さとか、表現の見事さとか、男とはなんぞやとかといった捉え方からきていると思います。たいへん衝撃を受けた1冊でもあります。

それで、プロの小説家になって、いつの間にか66歳になりました。司馬さんがお亡くなりになった25年前はおいくつだったか、ということ

方がそこにいるという形になっています。僕の作品で言うと『童の神』で、同じような構成を意識させてもらいました。

古屋 テレビですとか映像でもご覧になりましたか。

今村 拝見しました。ただ僕は見たことないんですが、祖父が「我が剣、我が命」とよく歌っていたんです。たぶん初期の頃の映像作品だと思うのですが、亡くなった祖父が歌っていた作品がこうやってもう一度映画化されるのが、いかに長い間日本人に司馬作品が愛されているか、という証左だと改めて今回の映画化の

考える歳になりました。ちょうど偉すぎる父親を前にする、不良息子みたいな気分が司馬さんに対してありまして、「敵わないな」という思いと、「なにくそ」と反発したい思いが今でもあります。

古屋 『竜馬がゆく』ではどういうところに衝撃をお受けになったのですか。

安部 やはり、次から次に困難を克服していった、前へ前へと進んでいく竜馬の生き様ですね。

古屋 安部さんのご経歴を拝見しますと、図書館の司書をなさっていたということですが、先ほどの上村館長の、司馬さんは旧制中学の時にずっと図書館通いをしていたというお話を伺っていかがでしたか。

安部 図書館司書を5年間やっておりましたが、役所仕事は嫌で、それは3時間ぐらいで終わらせて、残りの5時間は、下の書庫に降りて、米屋の倉に潜り込んだネズミみたいな気分分、本を漁っていました。しかし、司馬さんが図書館で膨大な思想を作られたことを思えば、僕のこの5年間は、やっぱり貧弱だったなと思わざるを得ないですね。

◆ 近江の風景の中の歴史

古屋 3人の司馬さんとの関係を伺いましたが、なんと言ってもここは近江国でございますので、近江についてお書きになった、この部分をお聞きいただきたいでしょう。

「近江路は春がいい。しかし車窓から見る湖東平野は、冬こそいい。下り列車が美濃に入り、関ヶ原にさしかかると、吹雪にたたかれる。しかし数分後に近江へのかすかな登り勾配にさしかかれば、吹雪が追って来なくなる。北近江に入れば、もう陽が射している。ただし、田の面は見たすかきり白い。どの田のあぜにも、榛の冬木がならんでいる。稲掛けにするために田のあぜに



うえられた榛の木の風景は越後の春日山城のふもとの野でも見られるし、むかしは日本の各地でそうだったようにも思われるが、いまは近江特有の水田風景といっている。ときに榛の木々が、腰を雪にうずめたようにしてならんでいる。しかし列車が野洲の野に三角錐をなす三上山が見えるあたりまでくると、うそのように雪がなくなり、鎮守の森などのクスノキの葉がきらきらと陽に光っている。近江という一カ国のうちに北国と南国がある。」

という、司馬さんの文章ですが、今村さんはこちらの方にお住まいですが、この文章はいかがですか。

今村 ちょっと僕は衝撃的なことに気づいてしまったんですが、これっぽいことを、今回の僕の最新作『塞王の楯』で書いているんですよね。北と南でこれほど顔の違う国は少ないと。だから僕はたぶんこれが僕の文章の源流だったのかなと思います。僕はこれを咀嚼して、もっと拙いものなんですが、自分の言葉でこれを書いていきます。

僕が滋賀県に来たのは2009年で、彦根に住んだんですね。彦根の

面白いです。私は、京都の東の方に住んでいるんですが、ちょっと何か疲れたことがあったりすると、車でびゅーんと滋賀県の方に來たりしています。司馬さんが滋賀に憧れたというか、心惹かれたお気持ちはないとなく想像がつかます。

古屋 北と南の話がありました。東と西、湖東と湖西について司馬さんがこんな風に書いていらつしやるものがあります。

「静岡県の東半分は駿河で、西半分は遠江という。浜名湖のしろじろとした水が大和人にとって印象を代表するものだったにちがいない。遠江は、遠く淡海のチチメ言葉である。」

それに対して、近くにも淡海がある。近つ淡海という言葉がちぎめて、この滋賀県は近江の国といわれるようになった。国のまんなかは満々たる琵琶湖の水である。(中略)

湖東は平野で、日本のほうほうからの人車が走っている。新幹線も名神高速道路も走っていて、通過地帯とはいえず、その幅員ぶりは日本列島の朱雀大路のような体を呈しているが、しかし湖西はこれがおなじ近江

かとおもうほどに人煙が稀れである。「湖西はさびしおすえ」

と、去年、京都の寺で拝観料をとっている婦人がいった。そのあたりに彼女の故郷の村があるらしく、あれはもう北国とす、と言いつ、何か悲しい情景を思い出したらし、せわしくまぶたを上下させた。「そこへゆくと、京はにぎやかで」といつて、私から百円の料金をとりあげた。」

たいへん面白い文章なのですが、澤田さんいかがですか。

澤田 湖西はたしかに寒いなど思います。特にあの白鬚神社のあるあたり、山と湖が迫った一帯に車が差し掛かりますと、風がびゅーと冷たかったりして、ああ湖東の方、湖の向こうの方は暖かかったのに琵琶湖をくると回ってくるところも違うかと思えます。でも、寒いからこそ、琵琶湖の全く違った景色が見えて、それが私は大好きです。あのまさに『街道をゆく』の第1巻の表紙になっている白鬚神社の大鳥居のところは、そもそも地形からして湖東とは全く違う。後ろの方に山がそびえ立ち、水際もすぐそこです。

駅で言うと、南彦根、彦根の2か所に住んで、その次が東近江市の太郎坊宮の近くに住んでいました。その次が草津。大津では南郷あたりに住んで、また大津の中で移動する。結構移動して、どんどん京都に近づいているんです。京都に逃げるつもりじゃないかと、滋賀県の方に言われるんですが、いやもうここで終の住処だと思っていると答えるんです。

僕がダンスインストラクターの時に教えていた場所が、近江八幡とか高島、米原とかでした。そういう意味では琵琶湖をぐるぐる回っていたので、こんなにも場所によって顔が違うということは実感しました。北国と南国があるということもありますが、加えて都市部があったり、鄙びたところが残っていたりとかもあります。僕はそういう滋賀県に惹かれません。よく滋賀県の方は琵琶湖しかないっておっしゃるんですが、僕からしたら琵琶湖があるじゃないかという思いがあつて、僕は本当にこの近江国が好きで、この地に住まわせてもらっているという感じです。

古屋 京都にお住まいの澤田瞳子さ

私は、先日まで毎日新聞で額田王を主人公にした小説を書かせていただいたのですが、そこで額田王たちが有名な蒲生野に草摘みに行く場面があります。やはり山と湖の間隔が狭い近江京の方から湖を渡って、遙々とした東の野原の方に行つたら、それはそれは楽しかっただろうなということ、滋賀県に来るとつくづく肌で感じられます。

古屋 安部さんはそれこそ東の方からこちらに來られて、こういう風景をどのようにお感じになりますか。

安部 さつきお読みいただいた所で、関ヶ原を抜けて雪山のふもとを分けて、琵琶湖が見える位置に出てくると、昔、東北は東夷の国と言われていましたが、そこから文明の地に出てくるんだという感覚があります。司馬さんは、私には古代人の記憶があつてとか、古代人の血があつて、とよくお書きになられますが、そういう東から來た人間が、こここそが文明の地だと思つた感覚がよく分かります。

昔から近江を制する者は天下を制すると言われていて、それはやはり

んはいかがですか。

澤田 私は京都在住ではありませんが、実は母が琵琶湖の高島に別荘を構えておりました。だから子どもの頃から高島の方にかなりよく出かけていました。

先ほど古屋さんがお読み下さったのは湖東について記された箇所なのですが、司馬さんの『街道をゆく』の連載は、湖西の方から始まっています。私自身はといえば、非常に湖西の方に思い入れがあります。大学に入ってから、大学のクラブで滋賀県の和邇浜で毎年2月に8泊9日の合宿をしていました。もう2月の半ばになりますと、京都の方は比較的暖かくなつてきているんですが、滋賀の方ではまだ風が冷たくて、でももう暦は春なんだなと思ひながら浜辺に出て北の方を見ますと、比良山の方にはまだ雪が残っていました。まさに先ほどお読みいただいたように、ひとつの国の中に北と南がある。こつちはもう春の景色なのに、北の方にはまだ雪が残っている。湖を隔てたり、野原を隔てたりして、全く違う景色が見えるというのが滋賀県の

琵琶湖を中心とした水運なんですね。日本海の水運が敦賀から琵琶湖に繋がり、それから太平洋水運が伊勢湾から中山道を通つて米原へ出てくる。そして大阪湾の方へ川が流れているわけですから、ここは太平洋と日本海と瀬戸内海を結ぶ結節点なんです。そこに、近江商人が生まれてくるのは天下の必然でありました。その近江商人たちの家風がいれば、「三方よし」の商いをしなさいという事です。これはまさに資本主義的な鉄則でありまして、論語と算盤ではないですが、そういうことを近江の人たちは昔から知っています。すごい土地柄だと思いますね。

古屋 そうですね。そして海もそうでしょうが、道、中山道とかいろんな道が関ヶ原のあたりで集まっている。あそこで関ヶ原の戦いがあつたということ、やはり何か必然であるんでしょうね。

安部 それはもちろん東国と西国を分けた所ですからね。天下分け目の戦いは皆さんご存知だと思いますが、関ヶ原だけではなくて、壬申の乱も、あの関ヶ原のところまで戦つた。そこ

で天武天皇になられる大海人皇子が、戦勝の褒美として将兵に桃を配ったので桃配山という名がついている。それから、南北朝時代、青野原の戦いというのがありますね。北畠顕家たちが京都を目指して攻め上がるときに、あそこが主戦場になって、不破関を突破できなかった。そのため、北畠顕家は伊勢に行かざるを得なかったという歴史もある。そして最後に関ヶ原の戦いがある。このように、まさに天下分け目の戦いが三度同じ場所で行われている。それも全く地政学的な理由だと思えますね。

古屋 澤田瞳子さん、額田王の話がありましたね、澤田さんの『恋ふるむ鳥は』という作品ですね。これにまさに壬申の乱が出てきますね。

澤田 そうですね。先ほど安部先生がおっしゃった、関ヶ原のあのエリアの不破関、古代の三つの関のうちの一つなのですが、その近くまで額田王が行くシーンもあります。壬申の乱のときは本当に滋賀県一帯で、いろんな小競り合いが繰り返されています。その時代の都は大津京なのですが、壬申の乱の最初の主戦場に

なるエリアは不破関あたりで、そこから湖東の方にずっと軍勢が下がってきて、最終的には瀬田橋あたりで大きな戦いがあります。そして、大津京を南北から挟み撃ちするために、北の余呉のあたりでも別の軍勢が来ていて、滋賀県を丸々飲み込んだ戦いだったとも言えると思います。

古屋 なるほど。それにしても天智天皇が、飛鳥からこちらに遷都して5年ぐらいして、向こうに戻りますよね。5年ぐらいの都というのはどういうものだったんですか。

澤田 発掘調査を見ますと、JR大津駅あたりの、たいへん狭いところに都が作られたらしいです。ただ、天智天皇はとりあえず大津に都を作りましたが、最終的には東側の湖東平野に都を作り直す計画もあったとの説もあります。もしこれが実現していたら、湖東の方はたいへん広いので、ひょっとしたら平城京や平安京に匹敵する一大都城が滋賀県に生まれていたかもしれません。

す。そして石の微妙な違いなどが分かる。また、これは今でもされていますが、手を洗って石に対する手の感覚を研ぎ澄ますということもそうです。社長さん自身がやっておられます。そうした作業は、屋外でされるので、真っ黒に日焼けされているんですが、手の平は真っ白です。そんな技術や伝統が、滋賀県には多く残っています。

古屋 穴太衆の技術は、有名なお城の石垣ではどこで使われていますか。

今村 現代風な言い方をすると、穴太衆のシェアはナンバーワンです。圧倒的シェアを誇っている集団です。穴太衆の流れを汲んでいるものも含めれば、いわゆるお城の石垣みたいなものほとんどに穴太衆が関係していると思ってもいいぐらいです。大阪城、名古屋城、熊本城といった、遠方の仕事も全部受けています。特に戦国時代では畿内周辺が多いと思うのですが、織豊期に入ると、技術を見込まれて遠方に派遣されていったようです。

古屋 この近くの安土城や彦根城もそうですか。

関係もあつたんですか。

澤田 天智天皇が遷都する少し前に、百済と新羅が戦になり、百済が敗れました。日本に避難してきた百済人を、滋賀県の湖東平野の少し北の、野洲あたりに集住させています。その百済人から知識を取り入れながら、天智天皇は国作りを目指していった。だからこそ、大津への遷都だったのかなと思います。

古屋 そうすると、朝鮮半島での白村江の戦いなどが、遷都の時代背景としてあるわけですか。

❖ 石垣と鉄砲

古屋 今村さん、今のお話はいかがですか。

今村 司馬さんも書いておられますが、滋賀県には朝鮮半島由来の地名がすごく多いんです。例えば「湖西のみち」で書かれています。和邇であるとか、あのあたりは秦氏一族が住んだという説もあって、技術が落とし込まれていった。

また、坂本あたりの穴太衆の石積み技術も秦氏由来、朝鮮半島由来じゃないかと。現代の穴太衆の栗田

今村 安土城も彦根城もそうです。大溝城とか膳所城、大津城もそうですね。

古屋 司馬さんの作品『梟の城』の葛籠重蔵が、石垣を登っていったりしますね。足を引つ掛けて。その時、その石垣が全く崩れもしないで、あれすごいですね。

今村 大学の実験や研究で、コンクリートと石垣に対して同じような圧をかけると、先に強化コンクリートの方が壊れました。穴太衆の石積みのほうが、上からの衝撃に強いという結果が出ています。

古屋 重心のかけ方とかですか。

今村 石と石が噛み合っていて、外にエネルギーが逃げないように積むらしいです。

古屋 安部さん、こういう話をお聞きになつていかがですか。

安部 石垣といえば、僕は藤堂高虎の小説を書いていまして、彼もまさに石垣作りの名人だったんですよ。伊賀上野城のあの真っ直ぐ立った、日本一と言われる高い石垣を作ったのは藤堂高虎です。高虎は二条城や江戸城の石垣も作っています。彼は近江の出身なんです。配下に

建設の社長さんもそう先祖から聞いているとおっしゃっています。穴太衆は紙に何も残さず、口伝で話を残しておられるので、先祖からそのように伝わっているということですね。

安曇川もそうですね。滋賀県にはキリがないくらい朝鮮由来の地名があります。これから発掘調査などが進んでいけば、こうしたことにまつわる遺跡、遺構などもたくさん出てくるんじゃないかと思えます。

古屋 このお話は、みなさんのところにも資料が配ってあります、今村さんの『塞王の楯』という作品に坂本の穴太衆、石垣の積み方の話があります。

今村 そうです。穴太衆は、石垣の積み方のことを、図面一枚も残していません。

古屋 どうやって積むんですか。

今村 まず、弟子として10年間から15年間、いちばん小さい石を並べるという作業をするらしいです。それをやっていたら知らないうちに石積みができるようになるそうです。

この弟子の期間は、いわゆる見取り稽古的な意味合いもあると思いま

さんがおっしゃったように上からの圧をうまく外に逃す、工学的な設計がされていることが分かりました。

天正大地震のときに伏見城が壊れたんです。秀吉が住んでいた御殿もべしゃんこになり、そこに加藤清正が謹慎中だったにも関わらず飛び込んでいって、助けたというエピソードがあります。加藤清正はその崩壊した伏見城を見ているんですね。そこからいかなる地震でも崩れない石垣が作れないかということ、熊本城の扇の勾配の形の石垣になった。やはり技術というものはすごいなと思いますね。

古屋 技術というものは、美しいですね。

琵琶湖を挟んでもうひとつの技術がありますね、今村さん。

今村 国友衆ですか。長浜市の旧国友村なんですが、ここは鉄砲鍛冶の村として皆さんもご存知かと思えます。鉄砲鍛冶についても、様々なことが言われています。数字的なことは分からないのですが、少なくとも織豊期において日本の鉄砲の生産量は世界有数だったことは確かです。



澤田瞳子氏（左）と安部龍太郎氏（右）

一説によると世界の3分の1の鉄砲保有国だったとも言われています。

その日本産鉄砲の中でも圧倒的シェアを誇っていたと言われるのが国友衆です。そして面白いのが、蒲生の日野です。日野が三番手にあげられるメーカーだったんです。国友は日野に技術を教えなかったらしく、日野は国友から技術を盗もうと必死だったらしいです。そのため日野は「日野筒」という安物の代名詞のように言われて、よく暴発するというネガティブキャンペーンが行われていました。でもそんなことはないんです。作り方が違うんです。その違いが分かったのは1615年の大坂夏の陣の直前だったらしいです。近江の中で切磋琢磨していたんだと思います。滋賀県がいかに技術に支えられているのかということですね。

古屋 ですからその桶が石垣であり、矛が鉄砲であり、この両方で琵琶湖を挟んでやっていたんですね。**今村** 概してお米があまりとれないところでは、技術売って発展し、技術が発達したというパターンがあります。でも、近江はお米がとれる

んですね。これは安部先生もおっしゃったのですが、「三方よし」の近江商人が発達したように、権力の往来もあり、京都という存在がそばにあるからこそ、需要と供給のバランスが取れていて、すぐ権力とかに売れる状況が整っていたんじゃないかと思います。

❖ 小説の舞台としての近江

古屋 私がとても感心し、現代的だと思ったのは、平和をきちっと守るのか、あるいは攻めていく中で平和を創り出すのか。言ってみれば、今の憲法論争みたいなものも含めて、どちらが平和に寄与するのかということがそこから読み取れる気がするんです。

今村 そうなんです。現代であるが戦国時代であるのが、この国の普遍的な問題をテーマにしたいと思う時、僕は、戦国時代にそういうテーマはないかと、逆引きで探すんです。今回は滋賀県に貢献したいとかそういうことはなく、たまたま穴太衆、国友衆が出てきたんです。どの時代の人にも葛藤があるのは間違いないと

思います。そういうことは記録には残らない。そこをフィクションで書けるのが小説家の良さだと思います。

古屋 澤田瞳子さん、今村さんのお話についていかがですか。

澤田 滋賀県の小説ということをはんやりと聞いていたのですが、今村さんのお話を聞いて、多分滋賀県ほど幅広い歴史を切り取って小説になる場所はないんじゃないかなと思います。例えば私は京都ですが、京都が歴史の舞台に躍り出るのは平安時代以降で、明治維新以降はあまり小説の舞台には出てこない。もちろん、現代小説には多く描かれますけど。でも明治、大正期の京都の小説はあまり書かれませんか。滋賀県は古



代から近現代まで、小説の舞台になることが多いと思いました。もう亡くなられましたが、水室冨子さんとおっしゃる少女小説の書き手がいらっしやいました。その方が、歴史物も少し書いておられて、その中の一つ『銀の海金の大地』という小説が、滋賀県の野洲あたりの息長氏を主人公にした古代大河小説なんです。その後、滋賀が舞台の古代小説は、井上靖さんの『額田王』もあります。戦国時代は、安部先生も今村さんもたくさん書いていらっしやるし、江戸時代になったら、舟橋聖一さんの『花の生涯』があり、これはNHKの第一回大河ドラマになりました。近代ですと水上勉さんや、最近の作家さんでは幸田真音さんなどもいらっしやる。これだけ幅広い時代が舞台になる場所はなかなかないと思います。どうしても滋賀県というと戦国と言われてしまうのですが、ありとあらゆる時代に歴史の舞台になってきた場所だと感じます。

古屋 安部さんの『平城京』の舞台は、戦国じゃなくて平城京でしたね。

安部 そうです。今は日経新聞で遣唐使の物語を書いているんですが、その当時の平城京はどうであったかということを書き知らなくてはいい。僕は物語を書きながら考えるタイプなんです。たぶん司馬さんも書きながら考えるタイプの人だったと思います。だから小説を書くということは、自分なりにその時代を体験してみることということに近いんです。

今書いているのは『ふりさけ見れば』という、安倍仲麻呂と吉備真備の小説ですが、『平城京』はその前準備のようなかたちで書いたんです。

古屋 安部さんと言いますと、『関ヶ原連判状』、『信長燃ゆ』、『蒼き信長』など、戦国のものが多いと思うんですが、やはり戦国が魅力的ですか。

安部 僕がずっとこだわってききたのは、信長って何なのだろうということなんです。みなさんもそう思いませんか。あれだけ聡明で天才的な頭脳を持っていて、しかも比叡山焼き討ちや一向一揆の殲滅という恐るべきことをやっている。そういう信長をどう評価したいのだろうと思っただけです。それで信長にずっとこだわって

るうちに、戦国時代の解釈そのものが、間違っていたんだということが分かるようになりました。

例えば、流通や商業とか、外国との交易です。従来の解釈は、江戸時代の鎖国政策の影響もあって、戦国時代のそうした点にはあまり焦点が当たっていないんです。安土城考古博物館に行く時、信長が使ったという三間半の長槍が飾ってある。三間半というと6メートル20センチです。これをどうやって使ったのだろうと興味を湧くわけです。6メートル20センチの槍を使うためには、どれだけ握りの太い木を使わなくては

いけないか、あるいは竹を使わなくてはいいけないか、ということになるわけです。そうすると、その重みとか機動性からいって、日本流のやり方では使えませんが、答えがなかなか見つからなかった。ところがある時、ヨーロッパのスペイン陸軍の戦術の変遷に関する本を読んでいると、スペイン陸軍が「テルシオ部隊」というものを発明した。この部隊は、長い槍で方形の陣を組んで、内側に鉄砲隊を

囲い込むという形をとります。僕も火縄銃を撃ちますが、鉄砲の弱点は弾込めの時間で、弾込めのときに敵に突っ込んで来られる。これをどう防ぐかということが一番の問題だった。それで考えられたのが、長い槍で陣形を組んで、槍ぶすまを作るということです。鉄砲隊は、撃つたらこの槍ぶすまの後ろに下がって、弾を込める。こういう戦法と戦術が、鉄砲伝来とともに宣教師たちあるいは南蛮商人たちの口から日本に伝わっているんですね。製品を売る時に使用説明書をつける現代のやり方と一緒にです。

使用説明で、なるほどそうかとなるわけですが、それを忠実に実行できたのが信長だけなんです。国友鉄砲記によると、これは司馬さんも書いていらっしやいますが、鉄砲が伝来した6年後には、信長が500丁を国友村に発注している。今の価格にすると、1丁500万円や600万円はするでしょうから、それだけの数の鉄砲を発注する経済力があつたということなんです。そういった視点で、なかなか従来の戦国史には現れてこ

ないということが、信長と付き合ってみて分かってくるわけです。**古屋** 司馬さんがお書きになった関ヶ原ですとか、斎藤道三と信長の話とか、あのあたりも興味深いですね。**安部** そうです。司馬さんには敵わないという思いと、なにくそという思いがあります。阪神ファンが巨人に持っているようなコンプレックスを、僕は常に司馬さんに持っております。司馬さんの作品を読みながら、素晴らしいな、すごいなと思います。それでもここは違うんじゃないかって、つい言いたくなるようなアンビバレントな両義性を持っています。

古屋 今村さんがすごく頷きましたね。

今村 記憶がふつと蘇ったんですが、僕が小説家になる前の話ですが、小説家になるには小説を書いて応募するんですよ。僕は『オール讀物』で、文藝春秋に原稿を送ったんです。応募作品は全部で900編くらいだったと思うんですが、最終候補の5作品に残りました。この時に選考委員だったのが安部先生で、その安部先生のおっしゃったことを、今もはっきりと覚えています。僕は

元寇の小説を書いたのですが、元が撃つてきた矢を主人公が抜いて撃ち返すシーンがあるんです。それを武器のことに詳しい安部先生は、矢の長さからみてそれは無理じゃないかとおっしゃった。当時、元が使っていた矢と日本の矢ではサイズ感が合わないから、こんなにスムーズに射ることはできないと、物語の細部のこともおっしゃって、それを思い出しました。

❖ 外から日本・近江を見ること

古屋 さつきスペインの話がありました。司馬さんのようにバスタ地方といった日本の外側から見て、日本を描くという視線はありますか。

今村 あります。僕はダンスを教えていたのですが、教えている若い人に、海外旅行に行くのは、海外を見るためではなく、海外から日本を見るために行くんだと言っていましたし、そう考えていました。これも司馬さんの影響だと思えますね。

古屋 澤田さんは、外から日本を見る、近江を見るという視点についてはどう思いますか。

ですが、そういう答えに残念がるんですよね。もうちょっと変わった返答が来るんじゃないかと思っていたとか、それまでの取材が長引きすぎて、朽木に着いたのが夜になってしまっているみたいなのとか。それでもまだ取材を続ける。僕だったら、夜になっただけで出直そうかなと思いますが、夜は夜で、夕刻から夜の朽木を見たらまた何か思うことがあるんじゃないかとか、多分どんな時でも好奇心の塊みたいな、そういう司馬さんがこの巻の最初からボンと出てくるのが印象的でしたね。

僕も湖西路が結構好きです。今は自動車道が高島までズドンといっているんですけど、ちょっと前までは小松までで、そこで旧道に下りていた。そこには琵琶湖に向かって下りていく道があるんですが、そこで琵琶湖に向かって視界が広がった時に、日が差し込んでキラキラとなるのが印象的で、あれを見てここに住みたいと思いました。僕も湖西路はそのくんだり結構好きなのと、そこに司馬さんの全てが表れている気がします。

澤田 そうですね。その前にまずひとつだけ言えることは、現代の歴史小説家はいかに司馬さんを越えるか、司馬さんの作品にいかにか立ち向かうかを、無意識、有意識、両方で意識していると思います。読者も無意識に司馬さんの作品と比べていらっしゃるところがあって、書き手である我々は、自分が読者として読んできた司馬作品をいかに越えていくかを問われ続けています。私は、今回直木賞を絵師の話でいただいたんですが、司馬さんも画家の小説も結構書いていらっしゃるんです。『天明の絵師』とか、『蘆雪を殺す』といった作品ですね。それ以外でもあるテーマを書こうとして司馬作品を読んだら、もう司馬さんが書いていたみたいなことが結構あって、いろんなところで司馬さんの存在を再認識させられます。



また一方で、作家が何のために小説を書くのか、書いている物語のほかに何を考えるのかというところ、司馬さんが物語の中から、歴史の中から、はたまた行かれた諸外国から見ておられた日本、司馬さんの日本観を

私にはNHKに入ってから、最初の赴任地が福井県だったんです。福井県から滋賀県の方に下りてきて、米原の方に行くわけです。するとわーっと広がって、すごいなあここはと思いました。

今村 滋賀県はいいところですよ。塩津とか海津の方も、余呉もいいところがいっぱいありますし、国境峠のあたりも、ここを鯖が運ばれていたのかと思って、良い場所がいっぱいあります。

古屋 澤田瞳子さんいかがでしょう。
澤田 私も湖西のくだりのところが好きなんですけど、今村さんがいっぱいお話ししてくださったので、私は信楽の話をお願いします。

我々はどうやって越えていくのかということではないかと思えます。私などはそれを、物語を書く中でずつと問われ続けている気がします。最近、歴史小説界でも日本とか海外ではなく、もっとポータブルになっていて、日本ってそんな閉ざされた国じゃなかった、もっと辺境や境界線上に生きていた人たちがいたよねという作品も多くなってきました。私自身もそういうポータブルな日本を書きたいなと思っているんですが、やはりそれは今まで考えられてきた日本、今までの日本観とは違う。ではどんな日本観を乗り越えていくべきかと考えていくと、ここでもまたやはり司馬さんの作品と立ち向かうことになる。

司馬さんが亡くなられて25年ではありますが、私自身は未だに生きている司馬さんと戦い続けているというのか、書かれたものと同じく合っている気がします。先ほど安部先生がおっしゃったように、いや敵わないなと思うとともに、いやちょっと待てよ、ここなら突破口があるんじゃないのかなと思つてまたはね返され

紫香楽宮を語られたときに、司馬さんが聖武天皇を評して、彼の少年時代は外国の使節がいっぱい帰ってきた時期だったので、聖武天皇もきつと唐に行きたいと駄々をこねたに違いないとおっしゃっているくだりがあります。聖武天皇は比較的最近まで、神経質でどちらかというと真面目で、ちょっと虚弱体質のように描かれる方が多かったんです。その中で、唐に行つてみたい、そんな好奇心旺盛な少年として聖武天皇を表現、推測している。司馬さんのその想像力の豊かさに非常に感心しました。

信楽の巻で、紫香楽宮はどこですかとボーリング場のボーイさんに聞いたら、知らないって言われてがっかりする箇所があります。紫香楽宮も、一般的に名前が知られるようになったのは平成に入ってからですかね。司馬さんが行かれた70年代、80年代にはご存知の方はそんなにいなかったと思うのですが、それを行つてみようと思われることも興味深いですし、ましてやその聖武天皇観を、司馬さんご自身の感性で捉えていらつしゃるところにも、独自の物

たりする、ということをずっと続けている気がします。

❖ 『街道をゆく』を読む

古屋 それではここから『街道をゆく』の方に話を絞りたいのですが、滋賀、近江が登場するこの『街道をゆく』には、第1巻の「湖西のみち、甲州街道、長州路ほか」のところに大津、安曇川、朽木谷が出てきます。そして第2巻にも出てきます。4巻、7巻、16巻、そして24巻に不破の関から寝物語の里、柏原宿、彦根城、姉川古戦場、国友あたりがずっと出てきてすごい数なんです。これだけ『街道をゆく』の中で近江が出てきますが、この中でこれがいまいちということろは今村さん何かございますか。

今村 やはり1巻の朽木のあたりのところがすごく好きで、最初のところの朽木に至るまでですが、あそこが司馬さんの全てが表れているんじゃないかと思えます。たしか朽木に向かう途中に漬物を漬けているおばちゃんが出て、司馬さんはわざわざ自動車から降りて何を漬けてるんですかと聞く。大根かカブだったと思うんで

の見方をなさる方だったのかなど感じました。

古屋 聖武天皇はなにか神経質で、都をあつちこつちに移したんじゃないかとか、そういうことを書かれますよね。

澤田 そうですね。ですので司馬さんは、他の人の説とかに対してどうこうではなくて、ご自身が感じられたことに対してまっすぐな方だったんだなということを、「甲賀と伊賀のみち」を読み直してつくづく思いました。

古屋 安部さんはこの『街道をゆく』はどうですか。

安部 やっぱ司馬さんは詩人なんだと感じますね。歴史の膨大な知識とそれを読み解く力量がある反面、先ほど冒頭に古屋さんが読んでいただいたあの場面はまさに一幅の詩です。その表現の魅力が司馬さんの『街道をゆく』のおそらく3割4割を支えているんだらうと思うんです。例えばその土地の歴史がメロディだとすれば、そのメロディに合わせて自分の夢と夢想を語る吟遊詩人のようだと思うんですよ、司馬さんの文章を読んでいると。

それを感じるのには近江の編にもあるんですが、僕が注目するのは陸奥編です。皆さん、あの司馬さんが、とお思いになるかもしれないですが、太宰治に対するシンパシーがものすごく強いんです。だから、元々はそういう詩的な要素をいっぱい持っていらっしやったのでしょうか。

近江編の中で一番シンパシーを感じるのには、琵琶湖の水について語られているくんだりです。いわゆる乱開発されて琵琶湖の水が濁って、それをどう維持するかということが問題になった時期がある。そこに、武村正義さんが現れて、知事として3期にわたって琵琶湖の水を守る活動をされる。その武村さんに対するシンパシーというか共感の持ち方。やはり司馬さんにはそういうところがあって、日本人は今や土木屋になってしまったとよくお書きになっていないじゃないですか。自然の中に生きるということはどういうことかを基本的に理解していない、と。その発言は、環境破壊が進む現在、ますます重くなってきています。例えば『街道をゆく』の中に、外国の記者たち

からインタビューを受けて、日本はなんでこんなに汚いんですかって尋ねられるシーンがある。そうしたら司馬さんは、いや諸君は50年前か50年先に日本に来るべきである、と答えるくんだりがあるんですね。50年前だったら古き良き日本の故郷、山川がいっぱい残っていたと。そして、今やこういう状態になったけれども50年先になったら、きっと日本人は新しい叡智を身につけてこういう環境破壊をしなくて自然と共存しながら発展できる方法を見つけ出すだろう、と書いていらっしやる。『街道をゆく』の連載が25年間続き、それでお亡くなりになって25年経っているわけですね。司馬さんのその50年先に寄せる期待に、我々はどれだけ応えられているのだろうか。そういうことまで考えさせてくれるくらいでした。

❖「その場に立つ」ことの意味

古屋 司馬さんは、その場に立つということの大切さをよく書かれています。『ガイド街道をゆく(近畿編)』

という本があるのですが、

「私のたのしみというのは、毎日、書齋でうすくまっていることらしい。杜子春が辻で人を待っているように、断簡零墨を見、やがてそこから人間がやってくるのに逢う。むろん、無数の場合、逢いどころねでもない。いまだにやっ来て来ぬ人もいる。」

旅には、そのために出かけるようなものだ。(中略)

たとえ廃墟になっていて一塊の土くれしかなくても、その場所にしかない天があり、風のおいがあかきり、かつて構築されたすばらしい文化を見ることのできるし、その文化にくるまって、車馬を走らせていたかほそげな権力者、粟粥の鍋の下に薪を入れていた農婦、村の道を歩く年頃のむすめ、そのむすめに妻問いする手続きについて考えこんでいる若者、彼女や彼を拘束している村落共有の倫理といった、動きつづける景色をみることもできる。(中略)

私にとって『街道をゆく』とは、そういう心の動きを書いているということが、手前のごとながら、近頃になってわかってきた。」

というのは昭和58年の文章で、や

はりその場に立つてみるということの大切さをおっしゃっています。『街道をゆく』のひとつの大きな魅力かなと思います。

今、インターネットで何でも知識だけが入ってくるような時代です。ね。だけどそこに立つて感じるこの大事さを司馬さんはおっしゃっています。今村さんどう思いますか。

今村 今はもう、写真だけじゃなくてデジタルマップでそこに立っているかのように360度周囲を見られるものもあるんですね。それは本物っぽいんですけど、「ばい」だけで、下調べとかにはいいのかもしれないですが、今は司馬さんのおっしゃっていた「その場に立つてみる」ことの大切さが確実にあると僕は思います。僕たち作家はそれを感じ取って文章にするという仕事があるんですが、そうじゃなかったとしても、例えばそれがただの観光であっても、「その場に立つてみる」ことをお勧めするんです。

『21世紀に生きる君たちへ』だったか、司馬さんがそれを書かれていた

ときに僕は子どもだったので、まさしく僕がそのメッセージを受けているような感じだったのは覚えていてるんです。僕は三十路を過ぎてもうすぐ四十歳になりますが、司馬さんみたいに次々とメッセージを送り出していける人になりたいなと改めて思いました。

古屋 『21世紀に生きる君たちへ』も非常に簡潔な言葉で、自分は21世紀を見ることはできないかもしれないけれども、君たち若者は自然に生かされている、人に優しくというその気持ちで大事にして頼もしい人間になってくれと、とても分かりやすい

文章ですよ。

今村 あれは小中学生にぜひ読んでほしいです。僕はあれを読んで、何かをやる大人になりたいと思いました。ぜひ読んでみてください。

古屋 澤田さんはその場に立つということに関していかがですか。

澤田 事実を知るとか地形を知ることだけだったら、インターネットや書物でも分かると思うんです。でもその場に立つ、そこに生きている人たちと話をすると、司馬さんがおっしゃったようにその風や風景を感じるということ、そこにあるものの過去だったり未来だったり、今ま

さに変化しているもの。この間まであそこは野原だったんだけど家が建つたんだよ、と時間の変遷を目にすることで、過去を知ることであり未来を知ることだと思えます。『街道をゆく』を読んでいいますと、例えばその古いものでいえば、湖西を歩かれたときは日本人の成り立ちだったり、日本民族はどこから来たのだらう、この言葉はどこから来たのだらうということに疑問を持たれていきますし、「近江散歩」では先ほど安部先生がおっしゃったように琵琶湖の開発のことだったり、水資源のことに対して深く関心を寄せられる。

でも結局、今起きている問題に対して関心を寄せるということは、未来に対する眼差しだと思えます。今回、『街道をゆく』を改めて読み返して、司馬さんの文章、あの紀行文というのには、ただその場の出来事を書いているのではなく、日本人の今まで、そして未来に対する幅広い眼差しを捉えたものだと思います。そう考えますと、我々はインターネットでの呼びかけひとつでどんなことでも知れるんですが、そこでは知ることができないこと、考えられないことを求めるのが旅のかなと感じます。



『街道をゆく』に登場する滋賀県の主な地点マップ



①安曇川



②興聖寺



③朽木陣屋跡



④海津



⑤余呉湖



⑥国友鉄砲の里資料館



⑪鬼室集斯の墓



⑫紫香楽宮跡



⑦寝物語の里



⑧馬見岡綿向神社



⑨賤ヶ岳



⑩姉川古戦場

◆『街道をゆく』のメッセージ

古屋 あと3時間くらい話をしたいのですが、そろそろ時間が迫っております。「『街道をゆく』のメッセージ」というタイトルをいただきましたので、最後に『街道をゆく』が私たちに与えているメッセージのことをひと言ずつ伺えたらと思います。今村さんからいきましょう。

今村 そうですね。澤田さんがおっしゃった、旅というものをなぜ人にするのかということが、これに表れてくるのかなと思います。人間って旅をするけど、同じ所に定住したがる。そして旅をする。「世に棲む日日」などありますが、日本人自体がひとつの旅みたいな感じがあって、この与えられた、限られた時間の中で、司馬さんはこの国を歩んで、何かを残されたのかなと思うんです。もう一度改めて、『街道をゆく』を全部読んで、僕ももう一回歩いてみたいなと思いました。

澤田 先ほどちょっとお話ししてしまった気もするのですが、『街道をゆく』のメッセージと言い換えます

と、私はやっぱり知ること、考えることかなと思います。司馬さんはこれこそ万巻の書を読まれた方ですから、旅に出なかつたってその地域について知ることができた。でもその場に行つて自分の目で再度知つた上で考えられて、日本人はどこから来てどこへ行くのかとの疑問に辿りつたかと思つておられます。それを『街道をゆく』で我々が読み解けることは、自分自身で学び続ける必要性であり、考え続けることの大切さなのかなと思います。仮に遠くに行けなくとも、自分が今立っている場所、今暮らしている場所をもう一回考えることで、司馬さんと同じ疑問と我々

はもう一度向き合えると思います。**古屋** 新型コロナウイルス感染症で、人がなかなか動けなくなつて今の状況ですが、そうするとそこに息づいている文化だとかが、うまくいかなくなる、消えていくということもあるかもしれません。そういうことのないようにしたいとは思いますが、最後に安部さんにメッセージをお願いします。

安部 司馬さんの『街道をゆく』を

読んで思うのは、愛情の深さですね。例えば街道筋の古い商店街に店が一軒まだ残つていて、その佇まいやそこを支えている人たちの風貌を本当に愛情豊かに描いている。あの愛情の深さがあるからこそ、いろんなものが新たな興味となつて湧き上がってくるのだらうと思つてます。どうしてここであんな悲劇的なことが起こらなくてはならなかったのかということ言えば、まさにその周辺には多くの事情があるわけですから、それを知らずにはいられないと。先ほど、上村館長のお話の中に、ニューヨークというものの語源は何ですかと少年の頃の司馬さんが先生に聞かれたけれど、答えてもらえなかつた。それで司馬さんは図書館に行つて調べた。そうしたら多くのことが分かつた。僕自身も歴史小説を書く上で、図書館に行つて調べますが、そうすると調べることに

よつてまた興味を湧くんですよね。司馬さんは旅をすることによつてまた興味を湧く。そういうことをやられたんだと思います。それで、あんなに忙しい中で、あんなにた

んの小説を残していらつしやる。普通だったらこの『街道をゆく』だけで、ひとりの作家の一生は終わりますよ。ところが、他にも全集が残るほどの仕事をなさつた。我々も頑張らなくてはと思いますね。

古屋 ありがとうございます。司馬さんは「湖西のみち」の冒頭で、「京や大和がモダン墓地のようなコンクリートの風景にコチコチに固められた川や湖までが粉雪のふるさであるよつ、においをのこしている。」とおっしゃっています。司馬さんは近江の国は近江だけではなく日本全体の故郷ではないかと思つておられたかなと、この文章を見て思います。私たちは、このシンポジウムが、お集まりの皆さんがご自分の故郷、その文化というものを見つめていく何かきっかけになれば嬉しいと思つております。



司馬さんの旅、司馬さんとの旅

寄稿

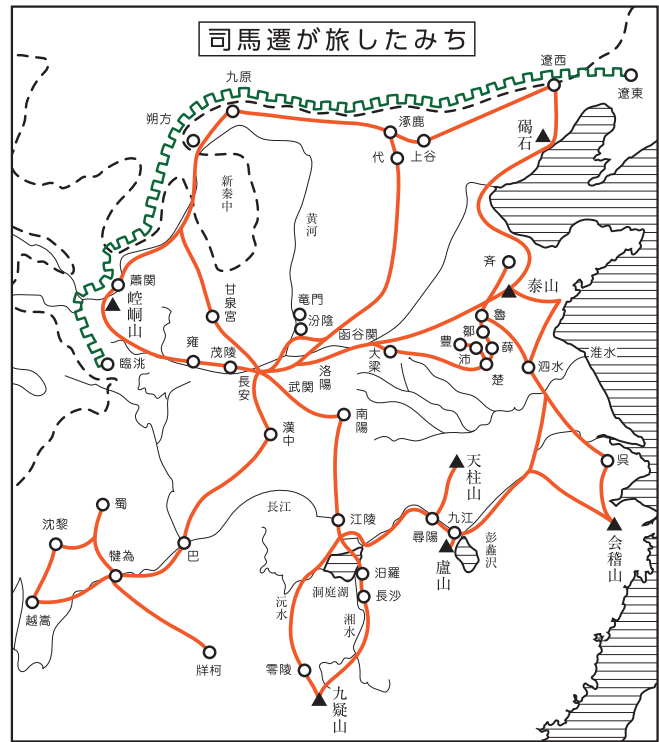
公益財団法人
司馬遼太郎記念財団常務理事
国立民族学博物館名誉教授
元坂の上の雲ミュージアム館長
まつばらまさたけ
松原正毅

時空をこえて

司馬遼太郎さんの名前(筆名)は、古代中国の卓越した歴史家司馬遷に由来する。司馬遷(紀元前145/135年頃〜紀元前87/86年頃)は、長安(陝西省西安)のちかくで生まれた。二十歳のころから、2〜3年の時間をかけた大旅行をする。長安を出発したかれの足跡は、陝西省、山西省、河北省、河南省、山東省、浙江省、江西省、湖北省、湖南省、四川省など広範囲におよぶ。のちに、雲南省にもその足跡をのこした。司馬遷は、訪れた土地の古跡を実見し、故老たちから歴史の聞き書きをおこなっている。同時にかかれは、万卷の書物や

資料にみずから目をとおした。

2000年以上のうちに、司馬さんも全6回(1944〜1945年の戦車兵としての中国東北部滞在は除く)におよぶ中国の旅で司馬遷の足跡の刻まれた土地のほぼ全域を訪れた。司馬さんの中国へのはじめての旅は、1975年5月の訪中日作家代表团(井上靖団長、日中文化交流協会派遣の一員としてのもの)である。この旅での思索の展開は、雑誌『中央公論』に「長安から北京へ」と題して1975年から翌年まで連載されている。1976年10月に、単行本(中央公論社)としてまとめられた。『長安から北京へ』刊行の3カ月後にあたる1977年1月から、「漢の



大島利一『司馬遷-「史記」の成立』(清水書院、1972年)8〜9頁 所収「司馬遷旅行図」を参考に作成

作家代表団の一員にくわわることを決めたところからおもわれる。このときの代表団は、中国側の手配のもとに北京、洛陽、西安、延安などを訪問した、司馬さんにとって、西安訪問が重要な意味をもったであろう。西安(長安)が、司馬遷に深いゆかりをもつ土地であったからだ。西安などの地を踏みしめるなかで、司馬さんの『項羽と劉邦』の構想は大きくふくらんでゆき、作品としての結

晶化への道がみえてきたとおもわれる。司馬さんは、旅のあいだも旅をおえたあとも時空をこえて司馬遷の描いた世界を自在にゆきまわっていた。『長安から北京へ』の執筆をおえたあと間もなく、「漢の風、楚の雨」の連載がはじまった。偶然のこともかもしれないが、司馬遷が『史記』の著述を開始したのが41歳のころ、司馬さんが代表団の一員として訪し

たのが満51歳であった。風、楚の雨」の連載を『小説新潮』ではじめている。この連載は、1979年までつづく。1980年6月の単行本化にあたって、題名を『項羽と劉邦』(新潮社)にあらためた。『項羽と劉邦』は、秦の滅亡から漢の興隆にかけての歴史の流れを、楚の項羽と漢の劉邦の対立と抗争を軸に描写した作品である。この作品では、二千数百年の時空をこえて、当時の激動のなかで生きた人びとの姿と人生が生きて生きたと描かれている。項羽と劉邦の行動やかれらにまつわる事績は、『史記』本紀に詳細に記録されている。司馬さんの『項羽と劉邦』は、稀代の歴史書に立脚した作品である。それでいながら、この作品は単純に

知の饗宴のなかで

1975年の旅のあと、司馬さんは1977年8〜9月新疆、1978年4月江南、1980年7月新疆、1981年5〜6月江南、四川、雲南、1984年4月福建と計6回の中国の旅をしている。1978年、1981年、1984年の旅には、わたし自身も同行した。この3回の中国ゆきが、司馬さんとの旅である。いずれも、楽しさに満ち溢れた旅となっている。

1978年4月の中国旅行は、蘇州会が主催している。蘇州会は、中国貿易をおこなっていた五同産業を中心とする文化交流団体である。この旅の主目的は、京都の法然院の伽藍配置のモデルとなった江西省廬山の東林寺を訪問するというものであった。訪問団の団長は法然院貫主橋本峰雄さん(神戸大学教授、哲学)、参加者は橋本夫人の佳さん、桑原武夫さん(フランス文学)、ご夫妻、小川環樹さん(中国文学)、司馬遼太郎さんとみどりさんご夫妻、松山善三さん(映画監督)と高峰秀子さん(俳

『史記』をなぞったものにはなっていない。『項羽と劉邦』は、『史記』の記述とは別の魅力をそなえた世界を提示している。それは、司馬さんが作家としての想像力を最大限に駆使して項羽や劉邦たちを含む登場人物に新しい生命をふきこんだからである。司馬さんがいつころから『項羽と劉邦』の構想をあたためはじめたのか、明確なことはわからない。おそらく、司馬さん自身は、はやくから司馬遷の描いた世界を作品化しようとする考えを懐いていたのではないか。司馬さんは、若いときから『史記』の文章に深く親しんでいたからだ。

作品『項羽と劉邦』の構想が具体化し結晶化しはじめたのは、訪中日日本(優)ご夫妻など二十人ちかくのメンバーであった。こちらからの希望と司馬さんからのさそいもあって、わたしもメンバーの一員となった。わたしが司馬さんと知り合いになったのは、1977年3月にあった加藤九祚さん(国立民族学博物館教授)の大佛次郎賞受賞記念の祝賀会の席上である。訪問団の旅は、上海、蘇州、廬山、九江、上海、広東、香港となっている。

中国での旅のあいだ、さまざまな印象深いできごとがあった。当時、道路整備もあまりすすんでいない状況で、自動車なども不足気味であった。上海のまちなかで、わたしたち一行をのせたバスが急にうごかなくなることがあった。年代をへた古いバスだったので、エンジンをこしたからだ。運転手がボンネットをあけていろいろさわっていたが、ちがあかない。突然、司馬さんが席からたちあがって「うしろからおそい」とよびかけてバスをおりた。同乗者のおおぐが司馬さんのよびかけに応じて、みんなであうしろからおした。しばらくすると、バスのエンジンが

かかった。席にもどった司馬さんが、「戦車兵だったからな」といった。あざやかな司馬さんの一連の所作であった。

廬山の頂上ちかくまであがって、別荘風な建物に宿泊した。翌日、廬山の東麓に位置する東林寺を訪問することになっている。東林寺訪問の前夜、現地の案内役の人たちとうちあわせの場で、中国側から「東林寺にはゆけない」という突然の発言がされる。その理由についての説明は、まったくくない。うちあわせの場は、はりつめた空気につつまれた。司馬さんが充分に抑制のきいた口調でいながら、舌鋒するどい発言をした。発言の内容は、硬直した官僚主義の具合わるさを指摘したものである。それでも、東林寺にはゆけないという発言は、かわらなかつた。翌朝、わたしたちは廬山の頂から東林寺の位置する方角を双眼鏡でながめしかなかつた。

廬山をたつて九江にむかう朝はやく、現地の案内役の人が橋本団長に瓦の破片を数個とどけにきた。東林寺の瓦の破片だという。東林寺は、

文化大革命のなかで徹底的に破壊されていたのである。訪問団が目的の東林寺をたずねることができなかつた理由は、これだった。立场上、文化大革命の傷痕の深さを外国人に説明するのが困難という点でもある。最終的には、司馬さんの発言にうごかされて、東林寺の瓦の破片を深夜にひろってきて手わたすという行為につながったようだ。わたし自身は、このときから5年後にあたる1983年夏に、再建された東林寺をたずねている。



1981年5月 蘇州にて
左手前から 廬山さん(週刊朝日)、司馬さん、蒲井さん(週刊朝日)、松原、張和平さん

1981年の江南、四川、雲南の旅は、『週刊朝日』の『街道をゆく』の取材をかねている。参加者は、司馬さんとみどりさんご夫妻、森浩一さん(考古学)、須田勉太さん(画家)など十数人であった。この旅の旅程は、上海、蘇州、寧波、成都、昆明、杭州、紹興、上海である。旅のあと、司馬さんは『街道をゆく』の連載を1981年から翌年にかけておこなう、『街道をゆく19』(中国・江南のみち、朝日新聞社、1982年)と『街道をゆく20』(中国・蜀と雲南のみち、朝日新聞社、1983年)の2冊にまとめられた。「江南のみち」の一部には、1978年時の取材資料が活用されている。

1984年の福建の旅は、『街道をゆく』の取材として企画されている。参加者は、司馬さんご夫妻と陳舜臣さん(作家)と蔡錦墩さんご夫妻、森浩一さんなど十人たらずであった。旅程は、上海、福州、福湖村、徳化、泉州、厦門、広東、香港である。この旅の紀行文は、週刊誌に連載されたあと『街道をゆく25』(中国・閩のみち、朝日新聞社、1985年)に



1984年4月 泉州にて
左から 松原、司馬さん、張和平さん、陳舜臣さん

まとめられた。

司馬さんに同行した3回の中国の旅で深く記憶にのこっているのは、夕食後の予定のはいっていない夜の時間にひらかれた談笑の場の楽しさである。司馬さんが話し上手なうえに聞き上手なので、話のやりとりのおもしろさが倍加する。アルコール類の力もくわわつてくるので、話にはずみがついてゆく。話題はあちこちにひろがり、その場は時空をこえた知の饗宴の様相をおびてくる。酒だけでなく、楽しい話の連続にこころよい酔いをおぼえるほどだ。

旅のもたらすもの

司馬さんに同行した旅で感心するのは、司馬さんが旅たつまえに関連資料のおお目に目をとおしていることである。文字資料からだけでも、一冊の本が書けそうなくらいだ。それでいて、なぜ旅をするのか。司馬さん自身の表現もまじえていえば、現地に足を踏みいれ土地の風をみずから身体の中に満たすことによって、蓄積した文字情報が生命をもつてくるといってわけである。生命を帯びた情報が、指先の万年筆を通じて文字となって表現される。当然、旅は不可欠なものになる。

「みずからの足であるき、みずからの目で見(広範に文字資料を渉猟することも含まれる)、みずからの頭でかんがえる」ことの重要性は、どのような領域においてもいえる鉄則である。問題は、この鉄則をどこまで実践できるかどうかである。この鉄則を徹底して実践するのは、至難の業といえる。

司馬さんは、「裸眼で」(『微光のなかの宇宙—私の美術観—』中央公論社、1988年所収のエッセーのタイトル)すべての事象にむかいあう姿勢の重要性をずっと指摘している。あらゆる精神活動において、ひとつのイデオロギーやドグマの束縛

からときはなたれて自在になることの重要性である。「裸眼で」という姿勢を常時つらぬくためには、精神的な強靱さが必要になる。この精神的な強靱さの源泉は、まさに「みずからの足であるき、みずからの目で見、みずからの頭でかんがえる」という鉄則に立脚することにつきる。司馬さんは、この鉄則に立脚する姿勢を保持できた類例のすくない人のひとりといえるだろう。

旅のもたらすものは、おおきい。現地にたつことを通じて、土地の風が身体の中にはいつてくるだけでなく、その場の色やにおいが記憶に深く焼きつけられる。焼きつけられた記憶を手がかりに、風景とともに歴史の層位を可視化できる可能性がうかがいがつてくる。ここで鍵をにぎるのが、表現力の強弱になる。豊かな認識をおおくのくにひろくつたえる表現力がなければ、意味のすくないものになるからである。司馬遷や司馬遼太郎さんの場合、すぐれた表現力をそなえていたということだ。これも、類例のすくない事例といえる。

司馬さんは、25年にわたる『街道をゆく』の連載を通じて日本の各地をおとすれた。中国だけでなく、ベトナムやモンゴル、オーストラリア、スペインとポルトガル、韓国、アメリカ、イギリスとアイルランド、オランダ、ベルギー、台湾などに取材旅行をしている。これらの海外取材の成果のおおきは、『街道をゆく』のシリーズのなかで刊行されている。中国には、司馬さんは1984年の旅を最後に足を踏みいれていない。

司馬さんの膨大な作品群の大部分は、時空をこえた旅からえた果実といえるだろう。それだけ、司馬さんにとって旅の重要性はきわだったものだった。5万年前ころにアフリカの地をはなれてユーラシアの各地に拡散していった現生人類にとつても、旅は根元的に必要な要素であった。旅という行為がなければ、現在までにいたる現生人類のその後の世界はなかつたからである。2019年末から世界を席卷しているコロナ禍の猛威のなかで、旅の重要性が一人層身にしみて実感できるであろう。



1984年4月 泉州にて

司馬遼太郎氏没後25年記念シンポジウム アンケート結果

来場者数: 412名 アンケート回答者数: 265名

○ あなたの年齢を教えてください。

年 齢	人 数
10代以下	1
20代	3
30代	10
40代	23
50代	47
60代	85
70代以上	95
未記入	1
合 計	265

○ あなたのお住まいの地域を教えてください。

地 域	人 数
大津市・高島市	76
草津市・栗東市・守山市・野洲市	62
甲賀市・湖南市	15
近江八幡市・東近江市・日野町・竜王町	33
彦根市・愛荘町・豊郷町・甲良町・多賀町	14
長浜市・米原市	9
京都府	11
大阪府	25
その他	20
合 計	265

○ 本日の公演を何でお知りになりましたか。

媒 体	人 数
滋賀県ホームページ	49
ラジオ	23
チラシ	31
新聞・雑誌	44
ポスター	2
市町の広報誌	8
SNS	23
知り合いからの口コミ	59
その他	29
未記入	2
合計(5名が複数回答)	270

○ 本日の公演には満足しましたか。

評 価	人 数
大変満足した	108
満足した	118
どちらともいえない	14
不満	0
とても不満	0
未記入	25
合 計	265

○ シンポジウムに登場した滋賀の地や司馬遼太郎氏ゆかりの地に行ってみたいですか。

評 価	人 数
行ってみたい	230
どちらともいえない	21
行きたくない	0
未記入	14
合 計	265

○ シンポジウムを通して、滋賀の魅力を再発見できましたか。

評 価	人 数
とてもできた	118
できた	101
どちらともいえない	13
できなかった	3
全くできなかった	0
未記入	30
合 計	265

近江から見る
『街道をゆく』のメッセージ

司馬遼太郎氏没後25年記念シンポジウム記録集

編集・発行 滋賀県文化スポーツ部文化芸術振興課
(〒520-8577 滋賀県大津市京町四丁目1番1号)

発行日 令和4年(2022年)3月

協 力 公益財団法人司馬遼太郎記念財団



主催：滋賀県 協力：公益財団法人司馬遼太郎記念財団
後援：大津市、彦根市、長浜市、近江八幡市、甲賀市、高島市、東近江市、米原市、日野町、滋賀文学会、滋賀県公共図書館協議会、
(公財)びわ湖芸術文化財団、文化・経済フォーラム滋賀、(株)しがざん経済文化センター、滋賀県立大学、成安造形大学